



TITLE:

謙虚な気持ちで

AUTHOR(S):

福田, 知可志

CITATION:

福田, 知可志. 謙虚な気持ちで. 静脩 1999, 臨時増刊号(1999)100周年記念
: 38-38

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37861>

RIGHT:

謙虚な気持ちで

福 田 知可志

このたび附属図書館は百周年を迎えます。私は一利用者として大学入学以来十四年間、事務補佐員としては五年間、資料閲覧・生活収入の両面で恩恵を蒙って参りました。この間、私自身紆余曲折あって、目標と自信を失いかけて、苦しい時期がありました。そんな時、私にとって附属図書館は好きな本と絶えず接することが許される場であり、所蔵される貴重な資料・様々なジャンルの本に触れ、好奇心を刺激される場であり、また、こうした図書閲覧を通して、自分自身を省み、冷静に見つめ直し、元気を取り戻す場でもありました。長い歴史を持つ附属図書館はあまたの利用者を受け入れ、その生きざまを見つめてきたことでしょう。これらの方々に比して、私は我ながら呆れるほど不格好な人生を送る未熟者に過ぎません。今はただ感謝の念で一杯です。

現在私は事務補佐員ではありますが、大阪市立大学に籍を置いており、附属図書館の資料を利用する場合は、卒業生扱いとなります。借用はできないものの、検索・閲覧させて頂いております。OPACシステムの導入に伴う検索用端末の大幅な設置など、附属図書館は毎年変貌を遂げています。カード検索を行う必要のある古い資料についても、職員の皆様のお蔭でコンピューターへのデータ入力が進められており、完成が待たれます。私が利用者として有り難いなど実感したサービスとしては、他に次の二点があります。一つは日曜日開館サービスの開始です。土・日の週末を利用した資料調査が可能になったことにより、従来の土曜日のみ開館されていた時代に比べて、時間的余裕を持って資料調査を行うことができます。日曜日開館を実施している大学図書館は、全国でもまだ数少ないと聞いております。二つ目は今年の四月から、生協のコピーカードを使えるコピー機が館内に設置されたことです（庫内・開架に一台づつ）。従来、学外者・卒業生は、カウンターの手続きの後に、資料を持ち出し、業務時間内に、館外で複写を終え、返却しなければなりませんでした。複写の量によっては、時間的制約の中、いっ

たん複写のため館外に資料を持ち出すことは負担に感じられます。現在は、卒業生・学外者は庫内に入れないため開架の一台を使うのですが、利用者が多く待たされることもしばしばです。

このように附属図書館は利用者にとってより使いやすい環境を整えつつあります。その一方で、あえて気になる点を挙げますと、現在の附属図書館は、残念ながら必ずしも静かで集中できる環境であるとは言い難いということです。

携帯電話の使用、私語を慎まず、友人とのおしゃべりに夢中な利用者が、近年急激に増えていきます。また館内での飲食は禁止されているにもかかわらず、もはや公然と行なわれています。館内のごみ箱からは空き缶・ペットボトルが溢れ、机の中に飲み残しが無頓着に放置される有り様です。マナーの悪化は深刻です。図書館に対する感謝の念、他の利用者に対する思いやりが感じられませんが、入館機のゲート前に注意を呼びかける掲示が設けてありますが、更に利用者の意識を高めるよう、注意・指導を徹底する必要があります。私達も事務補佐員として気をつけて注意していますが、効果はあがっていません。因みに大阪市立大学学術総合センターの状況と比べますと、ここは一階に喫茶が設けてあり、のどの渇きを癒すにもよく、友人との会話を楽しむこともできます。その代わり入館機のゲートをくぐれば私語・飲食の持ち込みは厳禁です。携帯電話の呼び出し音をたまに耳にすることもあります。私の見るかぎりでは、利用者はよく守っているようです。附属図書館とは広さ、利用者の数に違いがあるため、単純な比較はできませんが、静かな環境という点では、大阪市立大学が優れているようです。

今後、利用時間の延長など利用者へのサービスの充実は図られていくことと思いますが、サービスを受ける利用者自身も今一度謙虚な気持ちをしっかりと持ち、マナーを守って図書館を利用するようこの場を借りて呼びかけたいと思います。

（ふくだ ちかし：大阪市立大学大学院文学研究科修士課程）